

石川丈山研究余話

山 本 四 郎

はじめに

筆者が石川丈山（一五八三・天正一一〜一六七二・寛文一二）に關与したのは、今から四十数年前になる。恩師の西田直二郎先生から、詩仙堂から案内の小冊子を頼まれたが、自分もトシだから代ってやれと言われて、丈山伝が連載されていた骨董誌を貸与されたのである。小冊子は一九六一（昭和三六）年に出す（最近絶版）。

その後、しばしば詩仙堂を訪れておられた神谷義郎氏（愛知教育大教授）にお目にかかった。氏は丈山に心酔して氏の所有地に「丈山文庫」を造営、丈山が一時北白河に住んでいた小宅や庭の一部が敗戦後も残っていたのを移された。筆者もその築跡を一見したが、勿論何も残っておらず、その後住宅地となった。

詩仙堂はその後寺となって詩仙堂丈山寺となった。その当時だと思うが、ときどき詩仙堂を訪れておられた大仏次郎氏が、住職の石川琢堂師の懇請で詩仙堂総代の一人となられ、堂北の琢堂師新築の住居に「草々居」と命名された。その当時から数年間丈山忌（五月二三日）に丈山の遺物中の書類を展観、筆者もこれに関係した。なお大仏氏の墓碑は琢堂師の筆になる。

一九七一（昭和四六）年詩仙堂から出版した写真集『詩仙堂』（非売品）に、丈山の事蹟を執筆した。この時は丈山の養子石川克の後裔石川準三氏の奈良のお宅を伺い（現在東京に移住）、狩野永納（一六三一〜九一、山雪の子、『本朝画史』の著者）の描いた創建当初の詩仙堂の画（写真参照）、その他、三十六詩仙の肖像や、肖像を単純に線書きして丈山が詩をどのように入れるかを考えて書いた原稿など貴重な資料をえた。ついでに言うが、今日詩仙堂の大広間になっている方丈は創建当時はなく、丈山百五十年忌に尽力した平戸侯松浦静山（一七六〇〜一八四一、『甲子夜話』二七八巻の著者、この書中に百五十年忌について書かれ、この時寄せられた武士から庶民にいたるまでの書や詩歌類〈詩仙堂現蔵〉をたんねんに筆録し、また自ら凹凸竄十二景などを描き、丈山を模した隷書を入れる）が十年忌に尽力して余った金でこの方丈を増築したのである。

その八年後、料亭順正主人で茶道饗会を起し、またコレクターとして知られた堪庵上田堪一郎氏（数年前物故、書道誌「墨」に「最後の数寄者」として特集がある）が一九七四年に、所蔵の丈山の書を詩仙堂すこし東の京都民芸館（現在廃絶）で展観された時に、筆者はその解説文を書いた。

その前後であつたと思うが、琢堂師から丈山伝を執筆してほしいとの話があり、多少は勉強してインドネシア大学へ客員教授として赴任する前（一九七四）に素稿を琢堂師に託しておいた。一年後帰国したが、別に急ぐ話もなかったのではらくそのままにしておいたが、数年して本格的に完成してほしいという話で、また旧稿に手を入れはじめた。しばらく放置しておいたので、その間に一九八一、二年に「跡見学園女子大学紀要」に小川武彦氏が「石川丈山年譜」を発表されているのを知って同大学より寄贈してもらった。これは筆者が従来丈山の交友について林羅山の文集、詩集以外にあまり触れていなかった羅山の二子鷺峰や読耕斎、堀杏庵、松永尺五らの文集を博搜され、必要な原文や原史料を引用した頗る詳細な、まさに労作であつた。これは「上、上2」とあつて丈山が詩仙堂を造営して隠棲する以前で終つていたが、一九九四年に『石川丈山年譜、本篇』として青裳堂書店から発刊され、二年後に『続編』（『覆轡集』石川克編集の『新編覆轡集』と同続集の影印本が主）が発刊された。前者は約五〇〇頁の大作である（以下『年譜』と略称）。ただ小川氏は石川準三氏の資料は見ておられないようで、また詩仙堂の什宝も、多分今まで他見を許さなかったせいか未見のようである。また丈山の詩については多く詩の題のみで、若干丈山伝の資料となる点は採られている。什宝は今回詩仙堂総代の一人で熱心な丈山礼賛者の中野博文医博（大阪市浪速区桜川町住）の御尽力と同氏のカメラで一応撮影ができた。また詩については岩波版の『江戸詩人選集』第一巻が丈山、元政に充て、詩数は一部であるが、専門家の解説で、丈山が非常によく中国古代の詩人を研究し、その詩にとりいれていることがわかる。また書については綾村坦

園著『丈山』（文人書譜2、淡交社、一九七八）がある。近年中蘭英助氏が「艶隠者、小説石川丈山」（『新潮』一九九七年一月号、のち単行本）を発表された。清見寺との関係と丈山の青年期の詩の勉強や、詩仙堂隠棲前の住居（現代人の伝承、相当広いのが注目される）などが参考となる。

ところで丈山といえば詩と書において元政と並ぶ江戸初期の大家であり、庭園についても確実なのは詩仙堂（前述永納の図によると、入口は西側にあつて、その入ったところに多くの樹木があり、唐趣味の丈山の好みは三十六詩仙像をかざった四畳半の詩仙堂の前の小さな庭とされる）の外に枳殻邸涉成園があり、その他上高野の蓮華寺や京田辺市の薪一休寺に酬恩庵なども丈山作かとする説があるが、これらは確証はない。また篆刻の方でも頗る研究したようで、これら多方面の丈山の業績は、近代政治史研究の筆者には頗る重荷であり、一応丈山伝は書きあげたものの（出版事情の悪い折柄、目下出版交渉に奔走中）、内心忸怩たるを禁じ得ない。

なお付言すれば、先年三河安城の歴史博物館で丈山展が開かれ講演を依頼されたついでに周辺を案内して頂いたが、往年（といっても四十年ほど前）琢堂師とこの辺を一巡した時は、「石川丈山産湯の井」という木標が建っていた場所が丈山公園となり（最近丈山苑と改称のよし）、また近くの公立の小学校が「丈山小学校」という名称になっていた。また同地には「丈山会」があつて会員百余名を擁し、丈山研究と顕彰に尽粋され、その研究成果は安城市教育委員会発行の「安城歴史研究」に発表されている。

一 丈山致仕の理由について

丈山は三河国碧海郡泉郷（今の三河安城市泉町）に生れた。人見竹洞の「東溪石先生年譜」によれば、二歳の時に乳母につれられて祭に行った時のことを後年乳母に語ってその記憶力を驚かせたとか、四歳の時に野寺まで三里の道（これはオーバーで現在計測したところ一・五キロという）を叔父にせがんで同行したとか、その他少年時代より剛毅な三河武士の面影を備えていた逸話が伝えられている。

丈山の曾祖父信治が松平（のち徳川姓）清康に仕えた三河武士で、父信定は一五七八（天正六）年の田中城の攻略時に重傷を負うた。丈山はその五年後の出生で、母は本多重貞の女という。のちにも本多家との関係が出るが、この重貞は青野家に養子にいつているので、正しくは青野姓という。この負傷のせいでもあろうか、父は丈山をその膝下から手離したくなかったらしく、雄心勃勃の丈山は一三歳のときに家を抜け出して、忍城にいた叔父の石川信光の許へ行った。まもなく徳川家康が石川家の先祖の功績に鑑み丈山を幕下に加へたという。丈山一六歳の時父が死去したので、その直後のことらしい。一八歳の時に関ヶ原の戦に従軍したが、家康の幕下であるので直接戦闘にはかわらなかったらしい。それから二五歳ころまで家康に従って京、伏見、駿河、江戸の間を転々としていた。この頃家康に仕えた林羅山との交友がはじまったことは、丈山の生涯の重大なできごとであり、また二二歳ころ羅山、吉田（角倉）素庵を通じて藤原惺窩にも会ったという。

それから暫くは述べるべきことはあまりない。大坂冬の陣が丈山三

三歳の時、先登して処罰されるのが翌年の夏の陣である。年次は確定しがたいが、この間丈山の生涯に大きな影響を与えたのは、駿河の清見寺（巨鼈山清見興國禪寺）の説心和尚との交渉であり、説心の門下にはのちの大梁禪師がいた。禪では丈山の兄弟子になるという。このことは『年譜』には年次が確定しがたいためか、ほとんど触れていないが、小藺英助氏は清見寺発行の『清見寺の歩み 考』などに拠って述べられている。丈山は説心に参禅して印可を受けたという。また説心は詩心があって、とくに『三体詩』を講義していて、『三体詩素懷抄』の著もあるという（中田祝夫氏の編で勉強堂から一九七七年に出版のよし）。この詩集は『三体唐詩』が正式名称で、辞書には「さんたいし」とあるが、研究者の間では「さんていし」と称するという。三体とは七言絶句、七言律詩、五言律詩をいい、江戸時代に盛行した。『唐詩選』が中唐、晩唐の詩をほとんどとりあげていないのに対し、本集は中晩唐詩を多く載せる。とすれば説心は詩僧としては著名ではないが、地方における詩僧としては名をなしていたらしい。後年丈山が大梁禪師に与えた書簡中に（『新編覆瓿統集』、巻之十、『年譜』附編、六三四―五頁）、

……臨毫素正切遠懷、想夫河陽滿懸之花、三保茂林之松、田子長江之月、富兒半空之雪、拳在目前、是皆曩時僧和尚携童男、提酒榼、吟弄嘯傲於其間者盡在歳也。

毫素に臨んで實下の書簡を手にして、正に遠懷に切なり（昔を憶う情に迫られる）。憶うに夫れ河陽の滿懸の花（川の北に満開の桜）、三保茂林の松、田子長江の月、富兒（士）半空の雪、拳て目前に在り。是れ皆曩時（さきの時、昔）和尚（説心）と偕に童男を携え、酒榼を提げて其の間に吟弄嘯傲せしもの、盡し歳あるなり。

丈山は昔説心和尚と酒を携えて近辺の名勝をたずね、詩を吟じたことを想起しているのである。丈山が説心から詩を教わって、それを楽しみとしていたことがわかる。

丈山は一つの事に志すと、異常なほど集中する人である。時期はわからないが、この頃母親が病氣になって帰郷した時、看病の間に『文選』を読破したという。『文選』六〇巻は南朝梁の昭明太子の撰した周く南北朝約千年の詩文集で、はやく日本にも輸入されたが、頗る大部なものである。

丈山の詩としてつねに詩吟に出る「白扇倒まにかかる東海の天」はいつ頃のものか不明であるが、『覆轡集』の冒頭にあり、丈山四一歳の頃の作と推定され、羅山の丈山宛書簡では三六歳頃より羅山に詩を贈っており、(詩についてはなお後述)、ある随筆にある、丈山は三十にいたるまで目に一丁字もなし、などが、実に不確実かがわかる。これらの丈山の学問を考えねば、武士をやめて隠棲する一つの基礎は理解出来ない。

×

×

さて丈山が禁令を犯してまで先登したことについては、出発に際して説心に決意を語ったとか、京にあって母親からの激励の書簡に接し、重病を冒して籠で出陣し、途中乗馬し、水を飲むと心機一転、病もふっとび、官使と称して諸隊の先に出、禁令を犯して先登し、戦後処罰される(このあたり『年譜』一三九頁以下参照)。処罰されてなぜ武士をやめたかについては、『京都の歴史』(第四巻、七四一頁)に、

石川丈山も、三河武士として徳川氏の旗本で豪勇をもって知られていたが、関ヶ原前後、旧豊臣方の将士が政策的に優遇せられる

のに反し、譜代の家臣はかえって下積みにされる矛盾にあきたらなかつた。そこで苦悩の末、夏の陣を最後の機会として、みずから軍令にそむいて抜け懸けの功名をあらわす。今度こそは一国一城を恩賞にと期待してのことであつたが、しかしその結果は処罰となつて返つてきた。この時点で彼は武士をすて、惺惺を師として学問の道を歩む。

この種の本としてはかなり長い記述であるが、典拠は示されていない。

右の記述を論評することは若干の検討が必要であり(例えば旧豊臣方将士の優遇と譜代の下積み云々、軍令を犯しても一番乗りをすれば、軍令違反は黙認されて一国一城の主となりうるのか、これと関連して丈山の家格など)、今は深く立入らない。しかし右の説は管見の範囲では知るところがない。

いま一つ特異な説は後述する宮武外骨氏の丈山を密偵にしたようとする考えで、これが密偵となる芝居のようにみるが、暴論である。

ここで触れておきたいのは、小川氏が検討された、この一番乗りは丈山一人ではない、ということであり(『年譜』一三四頁以下)、他に三人(一説二人)いたが、丈山以外は他の取なしで復職した、丈山も松平正綱が取りなそうとしたが、丈山が断わつたので絶交同様となつた、という事実である。当時武士階級は上昇の階級であり、これやめて文人ないし詩人として立つには余程の勇氣が必要である。丈山の自記によれば、隠棲は自分の素志であつたと言っており、筆者はこれを信ずるよりないと思うのであるが、同時に文の道に進んでも将来性はあるという自信が、前述の学問よりしてあつたのではないか、とい

うことである。

いま一つ考えられることは、この夏の陣の年に元和と改元され、いわゆる「元和堰武」で、日本の大勢は平和に向う方向にある。徳川氏からすれば、なお若干の反抗は警戒してはいるものの、大勢は武士がその武略や武技をもって活躍する時代は遠ざかりつつある。丈山がその大勢を見て文に転じたのではないかという想像も可能であるが、これは資料的には論じ難い。

二 二度の仕官

丈山が致仕したのは一六一五（元和元）年である。この致仕ののち妙心寺に寄寓し、その雲居和尚が大坂城にいた塙団右御門に会いにいったのが問題となり、丈山はこれに関与したが、詳細は省く（『年譜』一四七頁以下）。

翌一六年母の病氣見舞に一時帰郷する。この時前述の松平正綱が復職をすすめたが断わったのである。

翌々一七年藤原惺窩に会うか。惺窩は詩人としての丈山のことを知っていたようである。林羅山は京都の四条辺の生れで、時々京都に帰っていたから、丈山は惺窩の高弟らとも交わっていた。

翌一八年（元和四）、『東溪石先生年譜』によると、

本多出羽守惺公之流落、請_レ二諸侯招_レ公、為_レ客。（中略）不_レ称_レ意而去。題_レ壁曰、白鷗不_レ伴_レ野水。

記述は極めて簡単で、この「一諸侯」が誰れであるのか、編者人見竹洞が知らなかったとか、知っていたが名を記するにはばかる理由があったとか説かれており、小川氏も藤堂高虎説（『土屋治貞私記』、天

野信景の随筆『塩尻』、徳川頼宣説（これは頼宣の紀州入部が翌年な

ので成立せず）、浅野長晟説（これは他にもあり、筆者も実は浅野家がのち広島に移ったので紀州の浅野とするのが自然と考えていた）があり、小川氏は断定し難いとされている。ところが前掲岩波版『江戸詩人選集』第一巻の月報に、小川氏が「元和期の石川丈山の動向」なる一文を寄せられ、「一諸侯」が藤堂高虎なることを述べられた。その概要は次のとおり。昭和五三年東京の古書の売立に「施氏七書講義慶長元和中刊古活字版石川丈山自筆朱墨訓点詩仙堂印有り。十八冊云々」と記されていた。概要は施子美撰の兵法七書の講義で、巻四二中の一四の巻末に丈山と一部菅玄同の識語があり、丈山のは巻二の「元和六歳在庚涸灘夏五月予主高虎公在南勢之邸舍而維之玄東生之本手親点之」とあり、識語の一に元和七年七月一日とあってこれは京都にいたので、伊勢にいたのは六年秋までらしい。また菅玄同の識語に元和四年四月に巻三六の訓点を行ったが不明の点あり云々とあり、小川氏はこの頃から丈山も参加していたとみられる。

号は南浦島鱗子、圯左近など。

高虎がなぜ丈山、玄同らを招いたかについては、この頃高虎が將軍秀忠の女和子まさこの入内問題や後水尾天皇の讓位問題で、江戸と京の間で奔走していたから、京との関連づけで招いたのではないか、また人見竹洞が「一諸侯」としたのは、丈山を高虎にすすめた本多正勝が元和八年父正純の件に連坐して出羽に流されているので、藤堂の名を出すのを控えたのではないか、というのが小川氏の推測で、筆者もこのあたりが妥当な見解ではないかと思う。小川氏はさらに丈山が兵法書を手がけているのは、なお完全に文の道に踏切りえなかったのではない

窓 かも推測される。元和四年といえは丈山武士たるを断念してより五年、三六歳であり、その五年後広島藩に仕えることになる。

とすれば、なぜ高虎が丈山や京の惺窩門の人びとを集めたかが問題となる。集めたというよりは客分として召抱えたらしい。その理由は、単純に高虎の好學に帰する見解と、当時高虎が和子入内に奔走していたので、京都との連絡を強化するためではないかとする見方があるが、確定し難い。

×

×

次に右から五年を経た一六二三（元和九）年、広島の浅野家に仕えた。それまで丈山は母を故郷においたままにしていたようで、老母に孝養を尽すために仕官せよと板倉重昌（京都所司代重宗の弟、のち島原の乱に総司令官、戦死）の紹介で重い腰をあげた。詳細な事情は省略するが、右のことはほぼ信用してよからうし、丈山が、母上が身まかれは辞職すると言ったことも信用してよい（その通りにした。なお後述）。

ここでまず問題となったのは、丈山の禄と身分である。従来五百石説・千石説・二千石説・三千石説があったが、小川氏が藩の記録から長晟に関する『自得公済美録』（自得公は浅野長晟の諱）より、二千石であることが明らかとなったので、まずこれを信用すべきとされる。身分は客分で、別に禄高相應の家来をもっていたわけでもない。その邸は広島尚古会編『石川丈山』（「尚古」特別号、一九二一）に図面まで出ている。これは『年譜』一九七頁に縮少再録されている。藩の重臣伴三右門（一本三千五百石、同書は丈山を三千石とする）と隣合せて、むかいに禪寺の興禪寺がある。昔この辺に石碑が建っていた

というので広島の人に調査を依頼したが、この辺は原爆で壊滅的打撃をうけて残っていないという。桜三百株を植えたというから、相当広い。

さて、この二千石というのは、家臣としては極めて高禄である。林羅山も千石に達しなかった。当時儒官や侍医はさほど高級でなかったから、丈山は儒臣でなく武士として召抱えられたのである。しかし禄高に応ずる家臣もなかったようだし、従って訓練の必要もない。丈山は着任後羅山にあてた書簡で、塵務に忙しくて詩文を楽しむ余裕もないと報じているが、着任当座はやむを得ないとしても、はたしてそり多忙でもなかったのではないか。さきの『自得公済美録』をみても、一六三〇年（寛永七）主君江戸参府にて留守中、九番目の橋の門番に配属されたとか、翌々一六三二年八月池田光政が備前へ移封されたについで、浅野家の使者として赴いたとかが記録され、さほど重大な用務は他になさそうである。しかもその詩集をみれば、周辺の名勝を訪ねたことは明らかで、母を伴って、その晩年の孝養に尽したのであるう。

母の死は一六三五年（寛永一二）で月は不明、丈山五三歳の時である。そこで丈山は翌年三月に辞職を願出たが許されず、病と称して三月八日に広島を離れて有馬温泉に入湯し、そのまま京都へ帰ってしまった。このことは『玄徳公済美録』（浅野長晟は前年死去、玄徳公はその子光晟の諱）によっても、七月二日付で、丈山は三月初旬当地を出船、留守居もおいているが、いまだに帰らないとあり、まもなく家の番人を撤しているのが確実な資料であり、船で出発して有馬へ行ったことは丈山の詩によっても明らかである。

三 凹凸窠・詩仙堂

有馬湯治を切上げて丈山は京都へ帰った。五四歳の時である。それから二年間ほど各地を転々とした。その理由はわからない。隠棲の地を捜していたのかも知れない。小菌氏は追手（といっても広島藩が丈山の帰任を求める捜索）の目を脱れるためかも知れないとする。親友の羅山にも報らせなかったので、羅山は丈山の居処が判った二年後に「嘗て聞く、君が帰休するところは京洛ならず江湖ならず、行く処に随つて市隠している。だから手紙を出さなかったのは頗る疎濶に似ている」と。

丈山と羅山は同年の生れてある。丈山が武から文に転じた時も羅山は大いに丈山を励ました。おそらく丈山の文才ないし詩才を認めていたと解される。その後も両者の郵簡往来はさかんである。事は羅山の文集や『新編覆醬統集』からわかる。羅山は丈山の詩文の進歩をつねに賞しかつ激励したし、のちにも丈山が、自分はこのように隠棲して国政のためになんらの寄与もしていないと慨くと、羅山は中国の文人の例を引用して、決して慨くに当らないと説くのである。

丈山は帰洛二年後にいまの左京区田中野上町辺にやっと住居の地を見つけた。今の京大理学部の前約一キロの地で、神谷義郎氏によって丈山隠棲地の碑が建てられている。小菌氏は同地を訪れて土地の人から伝聞するところを聞いた。勿論三百年以上経っているから、誤伝もある。その地は竹林のほとりて広さ約三〇〇坪とも九〇〇坪ともいう。相当に広い。睡竹堂と名付けられた。後にも再言するが、のちこの近くの一乗寺に造営し、相当金がかかったろうと密偵説論者は自説

にこじつけるが、当時このあたりは全くの田舎で、地価も大したことにはなかった。

丈山が帰洛した翌年の十一月に朝鮮通信使が京都に立寄り、江戸に向った。その帰途京都の本願寺（西本願寺北、のちの本願寺、現在山科に移転）にその翌年一月宿所を定めた。京都の文人詩人たちが訪れ、その詩学教授権試ちんぎと会談した。最近朝鮮通信使の研究はさかんであるが、丈山と権試のことについて述べたのは案外少ない。丈山は権試と筆談し、後に自作の詩多数を清書して巻物とし、権試に届けた。権試は丈山の詩才に感嘆して「日東の李杜なり」と評したことはよく知られている。外交辞令も加わって言うが、「大拙翁（当時丈山は大拙と名乗った）の詩巻に題す」に「今代騷壇の將、唯公独り名を擅にす」と書き出しているのも、丈山の詩才のゆえである。この詩巻は静嘉堂文庫に蔵されていて、「安城歴史研究」の第14号に岩月碧水氏が「石川丈山筆語録―与朝鮮国権学士菊軒（権試の号）筆注―」として詳細に紹介しておられる。『新編覆醬統集』にも多くの資料を収めている。

その後数年間、丈山は交友と勝地探訪の傍ら、生涯隠棲の地を捜し、一六四一（寛永一八）年、五九歳の春頃に一乗寺の地を定め、秋頃に新居を完成した。丈山はこれを凹凸窠と命名し、その建物の四畳半に三十六詩人の像と丈山自筆の隸書の詩を書いた額をにかけて詩仙堂と称した。

右の「凹凸窠」は筆者などはこの地に凹凸があるから命名したと考えていたが、『大漢和辞典』にも記しているように、「凹凸寺」というのは梁の武帝が建てた南京の一乗寺の別称で、唐の張彦遠の描いた

一乗寺の門の扁額を遠望すれば眼量して凹凸があるように見え、近ずいて見れば尋常の地であるところから、世人は凹凸寺と称したとあり、「凹凸花」も遠望すれば凹凸、近ずけば平らかな絵のことである。日本のこの地の一乗寺も中国の寺名をとったと思われ、今は廃絶しているが一乗寺があつて、地名も一乗寺といい、藪里村の一部であつたという。

次に造営費であるが、密偵説にこじつきたい人は、そこに結びつけたがるが、二千石で十数年間出仕し、母死去後は隠退の素志貫徹したかつた丈山に、その用意がなかつたとはいえないだろうし、前述睡竹堂の一畝く三畝をとつても、その点は首肯できる。ある記述によると、丈山辞任三年後に、旧藩主光晟は、自分は今迄丈山の辞任を認めたわけではないとして三年分の俸禄を与えたところがあるが、これは確証をえない。丈山自身はこのために蔵書を売却したと記しているが、ある研究家は、文人詩人にありがちな清貧を誇張する記述ではないかという。ともかくも当時この辺りは全くの寒村で、今日の地価から類推するのは誤りである。丈山自身は「詩仙図像序」に「寛永十八年春適^{また}まこの地に来て茆を誅し宇を葺き終焉の謀を為す」と記している。そして知友を招いて落成を祝った。

丈山がここに詩仙堂を造営したことについては、木下長嘯子が清水寺近くに建てた住居（主屋拳白堂）に、日本の三十六歌仙の像を掲げて歌仙堂と称したのに倣つたのであらうとする説が一般的である。この四畳半の詩仙堂こそは、丈山が最も心血を注いだ場所で、詩人の選定には羅山の意見も徴している。そのことは兩人の往復書簡からも詳細がわかり、羅山の返答は、実はすべて子息の鷺峰の筆になるもの

で、若年の鷺峰の学識は、まさに羅山の子息たるに恥ぢぬものがある。とくに丈山が断乎王安石を除いたのに対して、鷺峰は強く採用すべきことを述べている点などは、丈山がやや一徹すぎたと思われる。

その他では丈山のあげた人物を、鷺峰はかなり意見を述べ、丈山はそれをうけいれている。例えば丈山が宋子問をあげたのに対し、鷺峰は宋子問の人物よりして（例の劉廷之とその詩の一句、年々歳々花相似……の一件）除くことを主張したなどである。この図像は、石川準三氏所蔵の資料よりみて、丈山が一枚一枚図の輪郭と、そこに入れる詩の隸書体がそのまま記され、その文字の排列が四角あり矩形あり三角形ありで、丈山のデザイン感覚が窺われ、また小紙片一つより残っていないが、丈山が描いた衣服の模様がある。おそらく丈山は詩人の官位から服装を調べて画家に示したと思われる。画家ははじめの人が気に入らずに人を変えたところがあるが人名はない。探幽かと考えられ博物館で見てもらつたが、探幽らしきものもあり、そうでないものもあるというから、探幽一門かと思われる。探幽に関しては『覆髻集』中に一文あるのみで、深い交渉はわからない。現在画像は大部剝落している、近年小早川秋声画伯が模写した。しかし原物と殆んど同じものが名古屋の徳川美術館に所蔵されており、保存は良好である。丈山が新年に詩仙を祀つていたことは、数年の詩から明らかである。

創建当時の凹凸窠は既述のように狩野永納の描いた彩色図がある。永納は丈山より四八歳若い。丈山が参画した涉成園の傍花閣や漱枕居にも永納の絵があり、その若いころに丈山と交渉があつたかと思われる。図は既述のように入口は西にあって、勿論今の大方丈はなく、西側と北側に水流があり、北側（今の入口）に小木橋がかかっている。

西側入口に花木があり、そこを流れているのに「流葉涵」と記入があり、その奥の邸宅に近い今の庭に花を植えた「百花塙」と記入され、刈込みがないなど現況とは若干異なる。丈山にとって凹凸窠は余程気に入ったようで、凹凸窠十二景や十境をつくり、羅山が来訪すれば詩仙堂記の述作を依頼し、羅山の子息の鷺峰や読耕齋が来れば詩仙堂六物の記を依頼したりした。この六物にはそれぞれ丈山自作の詩を隷書の金文字で書いている。六物中特別なものは眉公琴で、明の陳眉公の所持していた七絃琴で李西湖が将来したと伝える。丈山がいかにして入手したか明らかでないが、おそらく人を長崎に派遣して求めたものであろう。

四 丈山の文芸と趣味

1 漢 詩

丈山は何よりも詩人として特筆大書される。前代には本場の中国人をも驚かした五山の詩僧の秀句があるが、それがやがて衰退して江戸時代に入ると儒者の詩が注目される（その過程は、岩波の古典文学全集の五山文学・江戸詩人集参照）。ところが江戸初期の儒家の詩というと道学臭を脱れないなかであって、丈山は自然を読んだ秀作が多く、かつ盛唐の詩を範とすべきを説いた点で（それ以前は宋詩を多く範としたという）も特徴づけられる。丈山の詩といえば、詩吟などではまず例の「白扇倒懸東海天」で、これは『覆醬集』の冒頭にあり、林羅山もその着想を賞賛しているのであるが（製作年次不詳、小川氏は一六二三（元和九）年と推定。同年の丈山と羅山の書簡、羅山は「奇巧」と評す）、研究者によると、着想は奇抜であるが和習を脱れずと

いうにあるようで、筆者も丈山の詩といえつねにこの詩が出るのに嫌らぬものがある。丈山の秀句は前掲『江戸詩人選集』が便利であるが、左に専門家の石川忠久氏がNHK「漢詩を読む」で取上げられた一首を参考までに掲げる（一九九九・一一）。（石『選集』一一七頁）。

写 閑 適

山樓熟靜幽	山樓靜幽に熟し
天性辟伊憂 ^①	天性伊憂を辟く
黃卷 ^② 觀無尽	黃卷見れども尽くることなく
白駒挽不留 ^③	白駒挽けども留まらず
暮堂蚊蚋沸 ^④	暮堂蚊蚋沸き
泉水月星流	泉水月星流る
對酒恰元亮 ^⑤	酒に對して元亮を恰み
倚筇憶阮修 ^⑥	筇に倚りて阮修を憶う
病羸双雪鬢 ^⑦	病羸双雪鬢
行理一虛舟 ^⑧	行理一虛舟
茹淡居安樂 ^⑨	淡を茹いて安樂に居り
道心万事休 ^⑩	道心万事休す

①言語の不明瞭、転じて言葉を濁して他にへつらう。②書物。③白駒（光陰・歲月）は留めることができぬ。④陶潜（淵明）の字。⑤晋の人。外出時は杖の頭に百錢を掛け、酒家に至って独り飲酒陶然としていた。⑥病みつかれて両方の眉毛も白くなった。⑦行動の原理。⑧物をのせぬ舟。『莊子』による。⑨あつさりしたものを食べる。⑩道義を求め心。⑪禪語、一切の心の働きを止める。

右は末二句以外はすべて対句で技巧的な作品。つぎに『覆醬集』について述べる。この「覆醬」の読み方と意味が

窓 頗る厄介である。結論を先に言えば、「ふしょう」と読み、醬油（又は味噌）を覆う粗末なもの、反古に等しきものの意である。厄介というのは次のとおりである。筆者ははじめ「ふくしょうしゅう」と読み、醬油をひっくりかえすとはいかなる意味かわからず、ある辞典（その書名が思い出せない）を見ると、味噌の蓋を覆う粗末な紙から、つまらぬものという意味だとあって、はじめて了解した。小川氏は『年譜』附編の末尾に本書の成立、覆醬の意味、種類と体裁について詳細に論じられている。そこにも醬油を覆う粗末なものと述べられている。そして、江戸時代の書目解題には殆んど「ふくしょう」と読み、ごく稀に「ふしょう」、或はおおう場合は「ふ」、くつがえす場合は「ふく」とあるという。念のために『漢和大辞典』や『大字典』をみると醬油瓶の蓋にする、著書や文章が余り読まれず、反古として蓋となるとあって、用例として『漢書』の楊雄伝にある人が、のちに醬瓶を覆ふのに用ひられはせぬかと恐れる、と言ったとあるから、二千年以上前から用いられた語である。また「醬」は「ヒシホ」「ミツ」、肉を和し「醬」と書き、また酒を和して「醬」と書く、みそのこととある。よって「醬油」とはみそのこととあり、また今の醬油とは少し違う（あるいは原形）のではないかなど種々考えられるが、厄介なのでこの辺で止める。要するに丈山ほどの人がこれを「ふくしょう」と読むはずはなく、また意味は自作を謙遜して命名したことは疑ない。

次に『覆醬集』については前記小川氏の詳細な解説に譲る。丈山は自身で詩集を編む意志はなかったらしい。ところが板倉重宗が同藩旧友の誼でぜひ詩集を編さんしてほしい、それを三河の菩提寺の長円寺に納めたいといった。その後丈山は九年間も放置し、重宗の懇請がい

よいよ急なので、自ら隷書で書して上下二巻とした。序文は松永尺五（一六四八〈慶安元〉年丈山六六歳、丈山より前記事情を記すよう求められた）と野間三竹（右の三年後、三竹は有名な玄孫の子、子苞・静軒）で、おそらく重宗の父勝重の三十回忌（一六五三〈承応二〉長円寺に納められた）。

右は一六七一（寛文一一）年以下続々刊本となり、さらに丈山の養子克の手により新編本と同続集が編さん刊行された。

○『覆醬集』上下二冊、石川丈山自筆、長円寺蔵、詩約三五〇首、

丈山の跋は一六五三（承応二）年、時に七一歳。

○『新編覆醬集』四巻、石川克跋一六七六（延宝四）年、三九四

首。丈山は右『覆醬集』の続集刊行を考えていたという。

○『新編覆醬集』一六巻刊年同前。本書は前二著が詩のみなのに

対し、丈山の銘、書簡、林家その他の詩仙堂記や凹凸窠・六物に

関する詩文・墓碑等を載せる。詩は約六〇〇首。

○『新編覆醬集拾遺』、埜直子方編。石川克は「続々集」を編む

つもりであったが果さなかった。埜直子方は石谷清成（石谷貞清

孫、貞清は幕臣、板倉重昌の島原の乱征討に副って出張。江戸町

奉行を勤めた人。丈山と旧交あり。その子武清に丈山は詩仙堂を

託そうとした。写本。詩七三首、書簡三九篇他。

なお丈山の詩の詩史における位置づけについては松下忠著『江戸時

代の詩風詩論』（明治書院、一九六九）、猪口篤志著『日本漢文学史』

（角川書店、一九八四）などがある。丈山は正式に詩を教授したわけ

でなく、門下と称するものが数人ある。詩を教えて束修をとるように

なったのは、丈山の次の世代からであるという。

2 書

江戸初期の著名な書家としては一般に寛永の三筆（本阿弥光悦・松花堂昭乗・近衛信尹）をあげる。専門の書家ではない。丈山は隸書の大家として知られるが、書道史では、当時中国から舶載された隸書の法帖が第一級のものでなく、従って丈山の書も上乘とはいえない、というにあるようである。書については前掲綾村坦園氏の著作が便である。本書は書道以外にも多岐にわたり、書は野間三竹から『星鳳樓帖』を借用して喜ぶ丈山を特記している。この野間三竹は玄琢の子で資産もあったことから、舶載の書も相当購入し、丈山は三竹から借用しているものも多い。三竹の著書は京大図書館にかなり所蔵しているが、独創的な著作よりは編さん物が多い。丈山は書の本も相当集めたと思われ、今回什物調査で『淳化閣帖』第五巻を臨書したのが見つかった。筆者など相当美事なものと思うが、如何か。

丈山の書はかなり残っている。前出の上田堪庵収集のもの（京都民芸館で展示、筆者解説）はさすがによく集められた。また石川準三氏蔵の丈山が近所の人に編物をしてもらった短文の福状（写真集『詩仙堂』に掲載）も八十すぎの書で、晩年に至るまで筆力は衰えていない。今日時々古美術商に出る丈山書幅は数十万円の値がつくが、偽書もかなりある。ある茶人から見てくれといわれた一点はほぼ偽書、念のため古美術商に確かめた。また先年三河安城の歴史博物館で、古美術商が寄贈した丈山書の写真を見た。十数点あったが殆んど偽書、この話を神谷義郎氏にすると、「あれは皆偽物です」との答であった。

3 篆刻

書と併せて篆刻においても丈山は注目すべき人物である。そのことは中田勇次郎博士も触れておられる（同氏全集所収）。篆刻史からいえば、隠元にやや遅れて来日した黄檗僧で書家としても名高い独立（どくりつ）なものが日本に伝えたのに始まるとされるが、丈山はそれ以前に、おそらく中国の法帖を見てであろうが、自ら試みている。それも中野医博の拡大写真による研究によれば、これは明らかに丈山自身が朱で書いたもので、それを版木屋に製作させたと見られる。丈山がデザイン感覚にすぐれていることは既に詩仙図像の詩の配置でも触れたが、篆刻もまたその一で、自ら篆刻を趣味とされる中野医博の丈山篆刻論は興味がある（未発表の一文がある）。

4 絵、茶、作庭

綾村坦園氏前掲書に丈山の絵三点を載せる。その隸書の賛や印から見て丈山と思われるが、絵を習ったことについては資料を得ない。詩仙堂什宝に狩野永徳の六曲一隻の山水画屏風がある。専門家に写真を見せたが、永徳は同名が他にもあり、有名な永徳の画ではないらしいという（署名は「法眼永徳」）。

茶については丈山を煎茶道の祖とする説がある。この説は今日一般に否定されている。この説の理由は、『煎茶綺言』にあるらしい。この本は活字になったこともあるが（家庭文庫）、その内容がすこぶる疑わしく、丈山が祖で、二代が丈山没後詩仙堂を守った儒者平岩仙桂で、三・四代が茶人で（名をあげているが人名辞典に全くなし）それを売茶翁かつぎ、自分は翁の三代売茶翁だとするが、これには傍証が

窓 一もない。丈山はよく野間三竹の茶会に招かれ、また友人の武田道庵は千家とも親しい茶人でもある（昨年発見の表千家四代江岑宗左の文書の展覧会に道庵の書展示、同文書は主婦之友社より公刊）。しかし当時茶会といえばまず抹茶である（念のため大阪市立美術館研究員にたしかめた）。丈山がとくに茶に心を入れた資料はなく、茶会も尋常一様の参会者であつたろう。

作庭については、これを学んだ資料を得ない。従つて詩仙堂と渉成園（これはどの程度かは不明）以外に、二、三丈山作庭説の庭があるが、確実な資料が出ない限り、まず伝承の範囲を出ないと思われる。

五 丈山密偵説の迷妄

さる高名の史家（但し近世史専攻ではない）と著名な作家が、丈山密偵説があると書いている。読者は筆者の高名ゆえにそれは事実のように思い込む例がある。

その原因は何か。一つには佐藤一斎の「丈山を夢みる詩并に叙」で前掲綾村坦園氏も述べられていて、一斎の『愛日樓集』に出てくるそうである。一斎自書の長文の書幅が詩仙堂に所蔵されている。伝来については詳知しない。一斎は京洛で夢に丈山が現われ、大坂の先登について「国家のために遊偵にならんと欲す」と言った、と記し、綾村氏はこれが丈山密偵説のおこりであろうとされる。一斎ほどの学者が、なぜこのようなことを書いたのか。戯文か。それとも江戸時代にそのような風聞があつたのかと、念のため太田為三郎編の『日本随筆索引』によつて諸随筆を調べたが、その片鱗を示すものもない。

それを大々的に書き立てたのが奇人宮武外骨氏の『明治密偵史』の

冒頭で、わざわざ丈山像の線画に「犬」という字を副えている。氏によれば、丈山が罪をえて再び出仕しなかったのも、しばしば字や号を変えたのも、すべて密偵の証拠となる。さる随筆に、丈山が広島にいた時、召抱えていたものに不埒の行動があつて放逐した、そのものが変名して丈山に仕えていたことを口実に他家に仕えようとし、その家から丈山に連絡が入り、丈山は、彼は手だれの者だから用心して連行して欲しいといい、丈山は使者の面前で首をはねたというのがあり、外骨氏はこれもこの男が丈山が密偵であることを知っていたからであるという。この話は小蘭氏も触れられていて、広島藩医の武田蒙庵が入洛時、ある人から、丈山の声色や行動は信長に似たところがあると聞いたと伝えている。丈山は気性の激しい人で、詩仙堂隠棲後も近くの川で米をかしている時、上流でいつも小便する子供がおり、数回注意するもきかないので槍でつき殺したという挿話もある。ともかくも外骨氏は丈山を密偵にしあげたいのであるが、確実な資料がなくて資料が残っていないのこそ密偵の証拠だというに至つては語るに落つという外ない。

かつて芭蕉密偵説もあり、高名な俳人が、テレビでそう疑われるフシがあることを述べていた。筆者は芭蕉の事蹟に通じないか、二ヶ月ほど履歴不明のことがあり、この間旧藩主から密命を受けたのではないかといわれていたが、このブランクを埋める資料が発見されて密偵説は雲散霧消したと聞く。ともかくも丈山や芭蕉のような高士を密偵という注目を惹き易い。筆者も二、三の話聞いた。変事があると丈山が一乗寺から男山の松花堂にのろしをあげ、昭乗が大坂城へのろしで知らせるというのである。京都所司代がいるのに全くその必要は

ない。また詩仙堂に江戸時代の望遠鏡があつて、これまた丈山が御所をのぞくためのものという説が立つ。中野医博が見たところ御所などとても見えない。さらに製作年代が入っていて丈山没後の製作とわかり、笑い話となった。

要するに筆者が今日まで調べたところでは、丈山密偵説を裏付ける資料は何一つない。

六 付

丈山が江戸時代を通じて一代の隠遁の高士と目されたことは明らかである。既に触れたところもあるが、西鶴が『武家義理物語』に一章をあて（丈山と再会を約した武士が雪を冒して詩仙堂を訪れ、少時談笑ののち、これで約を果したとすぐ辞去した話）、杉田玄白がその一字に「小詩遷堂」と命名したとき、また紫野栗山が在洛の間門弟を連れてしばしば詩仙堂を訪れたのは著名である。

詩仙堂を詠んだ詩も多い。その一部は詩仙堂の什室中にある。筆者もまた幕末の蘭方医新宮涼庭の一軸を得た。

胸中無気百雷消 遺却甲纏奇一瓢

鴨水橋東好風立 壁間長劍独幽窠

詩仙堂 鬼国山人頌

江戸時代の丈山追慕の最大行事は松浦静山肝煎の百五十年忌であろう。

おわりに

目下原稿を出版社に託し、また老懶無精にして若干記憶に頼った箇

所もあり、魯魚の誤なきやを怖れる。江戸初期儒学の研究は敗戦後余り進んでいないと聞く。その点小川氏の著作は力作たるを失わぬ。丈山の資料が博搜され、その遺風が再認識されることを期待する。



狩野永納筆 創建当時の凸凹窩全景

入口が西にあり、入った処に百花塲や流葉瀨があり、今の方丈がまだない点に注意。(石川準三氏蔵)

自第七
至第八

古蒼頡書

𠂇 𠂈 𠂉 𠂊 𠂋 𠂌 𠂍 𠂎 𠂏 𠂐 𠂑 𠂒 𠂓 𠂔 𠂕 𠂖 𠂗 𠂘 𠂙 𠂚 𠂛 𠂜 𠂝 𠂞 𠂟 𠂠 𠂡 𠂢 𠂣 𠂤 𠂥 𠂦 𠂧 𠂨 𠂩 𠂪 𠂫 𠂬 𠂭 𠂮 𠂯 𠂰 𠂱 𠂲 𠂳 𠂴 𠂵 𠂶 𠂷 𠂸 𠂹 𠂺 𠂻 𠂼 𠂽 𠂾 𠂿 𠃀 𠃁 𠃂 𠃃 𠃄 𠃅 𠃆 𠃇 𠃈 𠃉 𠃊 𠃋 𠃌 𠃍 𠃎 𠃏 𠃐 𠃑 𠃒 𠃓 𠃔 𠃕 𠃖 𠃗 𠃘 𠃙 𠃚 𠃛 𠃜 𠃝 𠃞 𠃟 𠃠 𠃡 𠃢 𠃣 𠃤 𠃥 𠃦 𠃧 𠃨 𠃩 𠃪 𠃫 𠃬 𠃭 𠃮 𠃯 𠃰 𠃱 𠃲 𠃳 𠃴 𠃵 𠃶 𠃷 𠃸 𠃹 𠃺 𠃻 𠃼 𠃽 𠃾 𠃿 𠄀 𠄁 𠄂 𠄃 𠄄 𠄅 𠄆 𠄇 𠄈 𠄉 𠄊 𠄋 𠄌 𠄍 𠄎 𠄏 𠄐 𠄑 𠄒 𠄓 𠄔 𠄕 𠄖 𠄗 𠄘 𠄙 𠄚 𠄛 𠄜 𠄝 𠄞 𠄟 𠄠 𠄡 𠄢 𠄣 𠄤 𠄥 𠄦 𠄧 𠄨 𠄩 𠄪 𠄫 𠄬 𠄭 𠄮 𠄯 𠄰 𠄱 𠄲 𠄳 𠄴 𠄵 𠄶 𠄷 𠄸 𠄹 𠄺 𠄻 𠄼 𠄽 𠄾 𠄿 𠅀 𠅁 𠅂 𠅃 𠅄 𠅅 𠅆 𠅇 𠅈 𠅉 𠅊 𠅋 𠅌 𠅍 𠅎 𠅏 𠅐 𠅑 𠅒 𠅓 𠅔 𠅕 𠅖 𠅗 𠅘 𠅙 𠅚 𠅛 𠅜 𠅝 𠅞 𠅟 𠅠 𠅡 𠅢 𠅣 𠅤 𠅥 𠅦 𠅧 𠅨 𠅩 𠅪 𠅫 𠅬 𠅭 𠅮 𠅯 𠅰 𠅱 𠅲 𠅳 𠅴 𠅵 𠅶 𠅷 𠅸 𠅹 𠅺 𠅻 𠅼 𠅽 𠅾 𠅿 𠆀 𠆁 𠆂 𠆃 𠆄 𠆅 𠆆 𠆇 𠆈 𠆉 𠆊 𠆋 𠆌 𠆍 𠆎 𠆏 𠆐 𠆑 𠆒 𠆓 𠆔 𠆕 𠆖 𠆗 𠆘 𠆙 𠆚 𠆛 𠆜 𠆝 𠆞 𠆟 𠆠 𠆡 𠆢 𠆣 𠆤 𠆥 𠆦 𠆧 𠆨 𠆩 𠆪 𠆫 𠆬 𠆭 𠆮 𠆯 𠆰 𠆱 𠆲 𠆳 𠆴 𠆵 𠆶 𠆷 𠆸 𠆹 𠆺 𠆻 𠆼 𠆽 𠆾 𠆿 𠇀 𠇁 𠇂 𠇃 𠇄 𠇅 𠇆 𠇇 𠇈 𠇉 𠇊 𠇋 𠇌 𠇍 𠇎 𠇏 𠇐 𠇑 𠇒 𠇓 𠇔 𠇕 𠇖 𠇗 𠇘 𠇙 𠇚 𠇛 𠇜 𠇝 𠇞 𠇟 𠇠 𠇡 𠇢 𠇣 𠇤 𠇥 𠇦 𠇧 𠇨 𠇩 𠇪 𠇫 𠇬 𠇭 𠇮 𠇯 𠇰 𠇱 𠇲 𠇳 𠇴 𠇵 𠇶 𠇷 𠇸 𠇹 𠇺 𠇻 𠇼 𠇽 𠇾 𠇿 𠈀 𠈁 𠈂 𠈃 𠈄 𠈅 𠈆 𠈇 𠈈 𠈉 𠈊 𠈋 𠈌 𠈍 𠈎 𠈏 𠈐 𠈑 𠈒 𠈓 𠈔 𠈕 𠈖 𠈗 𠈘 𠈙 𠈚 𠈛 𠈜 𠈝 𠈞 𠈟 𠈠 𠈡 𠈢 𠈣 𠈤 𠈥 𠈦 𠈧 𠈨 𠈩 𠈪 𠈫 𠈬 𠈭 𠈮 𠈯 𠈰 𠈱 𠈲 𠈳 𠈴 𠈵 𠈶 𠈷 𠈸 𠈹 𠈺 𠈻 𠈼 𠈽 𠈾 𠈿 𠉀 𠉁 𠉂 𠉃 𠉄 𠉅 𠉆 𠉇 𠉈 𠉉 𠉊 𠉋 𠉌 𠉍 𠉎 𠉏 𠉐 𠉑 𠉒 𠉓 𠉔 𠉕 𠉖 𠉗 𠉘 𠉙 𠉚 𠉛 𠉜 𠉝 𠉞 𠉟 𠉠 𠉡 𠉢 𠉣 𠉤 𠉥 𠉦 𠉧 𠉨 𠉩 𠉪 𠉫 𠉬 𠉭 𠉮 𠉯 𠉰 𠉱 𠉲 𠉳 𠉴 𠉵 𠉶 𠉷 𠉸 𠉹 𠉺 𠉻 𠉼 𠉽 𠉾 𠉿 𠊀 𠊁 𠊂 𠊃 𠊄 𠊅 𠊆 𠊇 𠊈 𠊉 𠊊 𠊋 𠊌 𠊍 𠊎 𠊏 𠊐 𠊑 𠊒 𠊓 𠊔 𠊕 𠊖 𠊗 𠊘 𠊙 𠊚 𠊛 𠊜 𠊝 𠊞 𠊟 𠊠 𠊡 𠊢 𠊣 𠊤 𠊥 𠊦 𠊧 𠊨 𠊩 𠊪 𠊫 𠊬 𠊭 𠊮 𠊯 𠊰 𠊱 𠊲 𠊳 𠊴 𠊵 𠊶 𠊷 𠊸 𠊹 𠊺 𠊻 𠊼 𠊽 𠊾 𠊿 𠋀 𠋁 𠋂 𠋃 𠋄 𠋅 𠋆 𠋇 𠋈 𠋉 𠋊 𠋋 𠋌 𠋍 𠋎 𠋏 𠋐 𠋑 𠋒 𠋓 𠋔 𠋕 𠋖 𠋗 𠋘 𠋙 𠋚 𠋛 𠋜 𠋝 𠋞 𠋟 𠋠 𠋡 𠋢 𠋣 𠋤 𠋥 𠋦 𠋧 𠋨 𠋩 𠋪 𠋫 𠋬 𠋭 𠋮 𠋯 𠋰 𠋱 𠋲 𠋳 𠋴 𠋵 𠋶 𠋷 𠋸 𠋹 𠋺 𠋻 𠋼 𠋽 𠋾 𠋿 𠌀 𠌁 𠌂 𠌃 𠌄 𠌅 𠌆 𠌇 𠌈 𠌉 𠌊 𠌋 𠌌 𠌍 𠌎 𠌏 𠌐 𠌑 𠌒 𠌓 𠌔 𠌕 𠌖 𠌗 𠌘 𠌙 𠌚 𠌛 𠌜 𠌝 𠌞 𠌟 𠌠 𠌡 𠌢 𠌣 𠌤 𠌥 𠌦 𠌧 𠌨 𠌩 𠌪 𠌫 𠌬 𠌭 𠌮 𠌯 𠌰 𠌱 𠌲 𠌳 𠌴 𠌵 𠌶 𠌷 𠌸 𠌹 𠌺 𠌻 𠌼 𠌽 𠌾 𠌿 𠍀 𠍁 𠍂 𠍃 𠍄 𠍅 𠍆 𠍇 𠍈 𠍉 𠍊 𠍋 𠍌 𠍍 𠍎 𠍏 𠍐 𠍑 𠍒 𠍓 𠍔 𠍕 𠍖 𠍗 𠍘 𠍙 𠍚 𠍛 𠍜 𠍝 𠍞 𠍟 𠍠 𠍡 𠍢 𠍣 𠍤 𠍥 𠍦 𠍧 𠍨 𠍩 𠍪 𠍫 𠍬 𠍭 𠍮 𠍯 𠍰 𠍱 𠍲 𠍳 𠍴 𠍵 𠍶 𠍷 𠍸 𠍹 𠍺 𠍻 𠍼 𠍽 𠍾 𠍿 𠎀 𠎁 𠎂 𠎃 𠎄 𠎅 𠎆 𠎇 𠎈 𠎉 𠎊 𠎋 𠎌 𠎍 𠎎 𠎏 𠎐 𠎑 𠎒 𠎓 𠎔 𠎕 𠎖 𠎗 𠎘 𠎙 𠎚 𠎛 𠎜 𠎝 𠎞 𠎟 𠎠 𠎡 𠎢 𠎣 𠎤 𠎥 𠎦 𠎧 𠎨 𠎩 𠎪 𠎫 𠎬 𠎭 𠎮 𠎯 𠎰 𠎱 𠎲 𠎳 𠎴 𠎵 𠎶 𠎷 𠎸

周史籒書

[illegible]

魯仲尼書

ᠤᠯᠤᠰ ᠤᠨ ᠤᠯᠤᠰ ᠤᠨ ᠤᠯᠤᠰ

秦李斯書

秦李斯書

田 畝 耕 耨 爲
政 爲 功 而 數
懷 令 傳 又 子
爲 民 爲 國

秦程邈書

三得一以清地得一以靈神
 得一以靈谷得一以盈萬物
 得一以生侯王得一以爲爲
 天下正其致之矣无以清

將恐歇

漢蔡琰書

家之初尚無為家

晉衛夫人書

衛禧首和南近奉勅寫急就章
遂不得與師書耳但衛隨世所
學規摹鍾繇遂應多載年廿
著詩論草隸通解不敢上呈衛

丈山筆臨写淳化閣帖第五（詩仙堂藏）